
渡り鳥の随行録

水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渡り鳥の随行録

【Nコード】

N6182T

【作者名】

水月

【あらすじ】

力と知識と知恵持つ三者が入り乱れて覇権をと名誉を求める大陸へ一組の男女が降り立った。

その目的は主君たる王女の封印を解く事。

従者の青年とその主君の王女、そして別の目的を持つとある傭兵。

半吸血鬼の集落を巡り3者は結託する。

戦場と傭兵が大目のダークファンタジー風味、汗臭さ大目のむせやすいお話です。

ブログ冒頭の前書きに諸注意を掲載しております。
用法容量を確かめて、正しく服用してください。

なお、筆者は感想・評価を頂くと小躍りして喜びます。

プロローグ（前書き）

誠に恥ずかしながら著者は10年来の厨二病患者でして、患う度に「黒歴史」と言う名の後遺症が刻まれております。

お影で某「えたーなるふおーすぶりざーど」に代表される厨設定や用語は大好物にもかかわらず、一口含むだけで悶え苦しむ有様です。ならば、「地名・名前の固有名詞以外横文字カタカナは禁止。『魔法』って単語もなし大好物の俺Tueeee!も禁止! 主人公は少し苦労させる」

などという縛りで書き始めてしまった次第にございます。

「そんな条件で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題しか無い」

まだ序章のみですが、気長にお付き合いいただければ望外の喜びです。

プロローグ

恐ろしい速さで、血が巡っているのを感じる。

陽は既に山へ半分重なって、もうすぐ自分の影と地面の見分けが付かなくなる時刻。

既に背中に宵闇が迫っていた。

そんな中をただ、ひた走る。

荷は逃げる瞬間に投げ込み、小銭もバラ撒いた。

換金するはずだった琥珀金の腕輪も放り投げた。

しかし目もくれずに追ってくる。

それでも彼らは追ってくる。

いつしか見た、鹿狩りの猟犬のように。

「待ちやあがれ！」

「んのガキめ！」

誰が止まってやるか！

後方から怒号が追い付くが心内で悪態をつく。

追いつかれればタダですまないのは一目見て解かっていた。

街道だからと油断したのが悪かった。まさかケダモノのような叫び声と共に、逆上した奴らに追われるなどとは欠片も思えなかっただろう。

狼避けに焚いた火で組んだ炎術陣さえあれば、例え囲まれても一瞬で返り討ちにする自信はあったのだ。
襲われたのがその陣の構築中でさえなければ。

苦し紛れに出来損ないを使った結果がこれだよ……
自嘲した瞬間だった。

「あづつ！」

脇腹に熱が走る。

痛みと気付いたときには矢でもナイフでもなかったことを感謝した。

が、投石が当たる距離まで詰められて、確実に状況は悪化している。

とにかく水場へ辿りつくことを願って脇腹の痛みも無視してひた走る。

せめて沢に、もし池か川に当たれば最高だろう。

みぞおちがギリギリと軋むが知ったことではなかった。

息が完全に切れようが止まれば命がないはずだ。

どうでもいい。今はなんとか水が欲しい！

「死ねえええ！！」

怒号と共に頬の真横を風が通る。

目の前を通り過ぎて道に突き立ったのはどうやら手斧。

あれ？ こんな光景前にも見なかったか？

彼自身が不思議になるほどに、音が薄れていつて周囲が静かになる。

自分の鼓動すらどこか遠い。

そういえば。

彼はかつて師匠と旅してた頃にもこんなことがあったなと思い出す。その時の師はいきなり追手の鼻先の地面を盛り上がらせて、盗賊全員を転ばせて見事に撒いてくれたはずだと。

「不意の事態で最も役に立つのは地術だ。触媒がどこにでもあるから覚えて損は無いな」

「どんな時でも一瞬で構築出来る様に鍛錬しろ」

「いくら水術に長けていても水が無くては話にならん。地の利へ常に気を配れ」

とっさの瞬間に触媒がなければ手の打ち様がないと散々言われていたのに。

身体で覚えて苦手な状況を潰せと言われ続けていたのに。

急に頬へ風を感じて現実逃避を打ち切られた。

今度は左肩の上を何かが通り過ぎたのだが、その僅かな時間をやけに長く感じていた。

額から伝って汗が目染みる。それでも目をこする余裕などあるわけがない。

罵声と怒号が飛び交っていた時は幸せだったなど、バカなことを考えた瞬間だった。

「がつ!？」

腰の下辺りを何かに噛み付かれた。

蛇？ いや、ナイフか!？

辺りが薄暗い。周りが見えなくなったら土地勘のある彼らが有利だ。確実に死ぬだろう。彼らの気配からすると、恐らく八つ裂きでも足りなさそうだ。

下手に反撃したのが悪かったか……？

いや、無抵抗ならきつと姫様も奪われただろう。
そう逡巡した瞬間、前から後ろへ流していた風景へふと違和感を感じる。

青い林を進んでいたはずが見れば左手には岩肌。
いつの間にか崖に平行して走らされていた。

足先の感覚がはとくに薄れ、吸ってるのか吐いてるのかもわからない。
い。

右の尻へ妙に熱さを感じていた。

突然、むうあはははは！！ と下卑た笑いが耳へ入る。

これ以上間合いを詰められたら多分何が飛んできても彼の足は止ま
ってしまつ。

服の中で踊る首飾りだけが妙に冷たい。

そして、すぐに視界が開けて、理解した。

滝壺。

飛び込まねば追いつかれる。

飛び込んでも、多分彼が浮いてくる瞬間を狙われるだろう。

そもそも息を切らしたこの状態で飛び込めば。

全力で投げた石が対岸に届くか否かの川幅、そしてその流れを生む
滝壺の大きさでは……

それであの笑いか！

彼は始めから、ここへ向かって走らされていたのだ。

滝壺は目と鼻の先。

土地勘の有利と獲物を追い詰めた優越感が、賊の足音は徐々に近づいている。

悩める余裕は無かった。

全力疾走の勢いのまま、彼は一瞬で吸えるだけの空気を頬張って滝壺に飛び込む。

水に足が付く感触と共に左肩に二匹のへビが喰らい付いた。

尻と脇腹と左肩、そして何よりも息を求める胸が痛みを訴える中、壺の底に尻が付いたのを感じて腰に縛り付けていた短剣を抜く。何か重いものが水に入ってきたのか、背中できぐもった音を感じた。落ちる水の流れに引き込まれた彼へ、まだ悪意は届かない。

幸いにも滝壺の底まで身長の倍近くあった。

息が持たない。間に合うか！？

銀細工の柄を持って閉じた眼前へ真っ直ぐに突き出し、水と同化した刀身に左手を添える。

今、お前に形を与えよう。

思い描いたのは、昔師匠が買ってくれた寄せ木細工の小さな箱。

体から何かが溶け出すような感覚を、少し遅れてその何かに包まれているように彼は感じる。

背中に硬いものが当たった。手斧の柄と失速した矢だった。彼はは身体を包む何かを、記憶の中の小箱と重ねる。フタを無くしても大切に取っておいた思い出の箱へ。

彼の足元へ硬い何かが出来た。顔に、身体に、流れを感じた。体が足場ごと水面を目指す。

「つぶ！つぶはあああ！！」

彼は限界だった全身の隅々まで使って呼吸する。弾かれた弓のように身体を起こしてむせることも忘れて息をする。顔をぬぐうと赤黒い闇色の空しか見えていなかったが、それでも追手の顔だけは想像できていた。

呼吸が整い始め、早鐘のような鼓動を抑え奴らを初めて見やると、男が六人いた。思った通り、口をだらしなく開いてなんとも付かない表情を向ける賊共が。

当然だろう。

水面に頭が映りこんで好機とばかりに得物を打ち込んだら、若造と一緒にせり上がってきた水の壁にことごとく阻まれたのだ。

彼のの眼前、四方には、突き出した腕一本分空けて奴らとの間へ水の壁と手斧三丁に矢が数本。矢尻だけが壁を貫いて止まっていたが、あの状況ならば当てさせなかっただけで上出来だろう。

どくどくと全身を巡る血の音、右手の滝の轟音。それしか聞こえていなかった。

「ふう……」

彼は大きく一息するとこれ以上無い最高の悪意をこめて笑いかけ、同時に滝壺から大きく水をくりぬく様を思い浮かべる。

走り続けて上気し、酔っ払ったかのような彼らの頬が青褪めた瞬間には水中から占い師が手に取るような水晶球が、しかし巨人が使いそうな大きさのそれが奴らに向かってのそりと現れたのだ。

もう、反撃の成功を確信していた。

重さが無いかのように水面に佇む大玉を、見ると同時に彼らは浮き足だった。

球越しに見る、歪んだ彼らの顔が滑稽で仕方ない。

そういえばこれをやるのも懐かしいな。

頭の中の水晶玉に冬の日の景色を投影すると、たちまちに白い冷気を吐き出してびっしりと表面に霜がつく。

腰ほどの氷球を造って自慢げに自分を売り込みに来た術師の男をからかって、影で仲間と笑い転げた日を脳裏に浮かべる。

自分の息子ほどの子供に倍以上の塊を造られた時の壮年の男の真っ赤な顔が思い出せた頃には、眼前の男達の背丈をも越える巨大な氷の球ができていた。

何かが破裂するのにも似た小さな音を立て、芯まで氷になったところでようやく身体が頭に追いついたらしい。

我にかえった一人が背を向けると次々にその背を追った。

本当にバカな奴らだ。球はひとつなんだから散ればいいものを。

寧猛な笑みのまま右手の小指を立てて、倒す。

坂でもないのに一瞬で加速した球が獵犬となった。

追う立場が逆になる。矢の刺さった水壁を消すと球がベキベキと木々を押しつぶす音が届いたが、獵犬の通った獣道に彼らの姿は見えなかった。

どうやら崖の反対へ少しづつ進路を曲げながら逃げているらしく、追尾する球も見えなくなる。

彼は思っていた。

今日はもう球を作れないがもう問題はない。術の支配が消えて球がもとに還るまではしばらく距離があるだろう。

……きつとそれまで奴らを球が追い退いてくれるはずだ。

「こつちだ。急げ！」

新手と思わしき声に気付くまでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6182t/>

渡り鳥の随行録

2011年10月9日03時52分発行